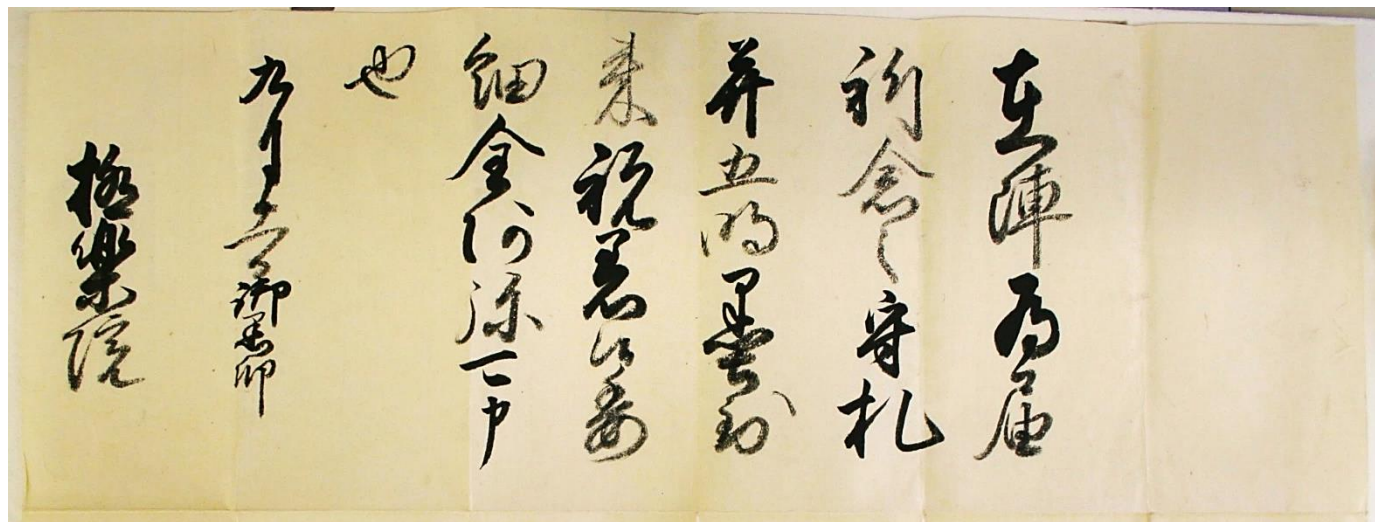




〔徳川家康黒印状カ〕

慶長5年（1600年）9月11日

関ヶ原の戦いに際し、^{ほんざんはしゅげん}本山派修験^{しょう}（^{ごいん}聖^{しゅげんどう}護院（京都市）を本山とする修験道）の極楽院（現高崎市箕郷町和田山）が、戦勝を祈願した祈祷札と墨を家康に届けたことに対しての返礼状の写と思われます。

多くの戦国大名は合戦に際し、領国の寺院に対して戦勝祈願を課していましたが、家康の領国となった上野国においても例外ではなかったようです。また、取次ぎを担った^{ぜんあみ}「全阿弥」は本名を^{うちだまさつぐ}内田正次といい、家康の初期の宗教行政において重要な役割を果たした人物です。

浦野安孫家文書 P0603 No.15

〔徳川家康黒印状写カ〕（慶長5年・一六〇〇カ）

《釈文》

在陣為^レ届^二

祈念之守札

并五明・墨^二到

来、祝着候、委

細全阿弥可^レ申

也

九月十一日御黒印

極楽院

本文之通無^二相違^一者也

賞珉印

《読み下し文》

在陣^{ざいじん}に祈念^{きねん}の守札^{まもりふだ}並びに五明墨^{ごめいぼく}を届^きけんが

為^{ため}の到来^{しゅうちやく}、祝^{いさ}着^いに候^{けう}、委細^{いさい}は全阿弥^{ぜんあみ}申^{まう}すべき也、

九月十一日 御黒印

極楽院

本文の通り相違無き者也、

賞珉印